

六四年、入社後すぐ、最初の担当が内之浦のロケットの追尾レーダの設計作業だった。ある日書庫の裏に雑然と積んである箱を見つけた。箱には青焼きの米軍のレーダの解説書が入っていた。戦後二〇年近く経っているので、この分野でも米國とのお付き合いがあり、その折入手したのであろう。目に留まったのはレーダの取扱説明書であった。

追尾レーダの文献ではなかったが、その内容はレーダの動作原理から操作方法まで記述されている。色々な人種で構成されている米國では、新兵であつても直ぐに理解できるよう分かり易い説明がされていた。使う人が納得するまで、質疑応答をいとわれない社会の慣習をのぞき見た。今でこそ、日本の製品は故障しないが、戦前はそんな統合技術のなかつた下での武器で戦わされ、不十分な部分は大和魂で克服しろなどと理不尽がまかり通た。最近でも、有名大学の理事が体育会系の名残で無理偏に拳骨の風習で大学経営し、大きな組織を動かして破局した例がある。

米國の大学生の教室の質疑応答の場面を見ると、われ先に手を上げ自分の意見を述べる。大分見当違いの意見もあるが、多方面の意見が出るのが大切で、雑多の中から、何となく一歩前進した意見があぶり出されて来るように思える。日本の場合、最初に手を挙げることを躊躇する雰囲気があり、あまり人から離れたことを言うと思われ、それを嫌う風潮がある。多分、教科書に近い意見を言うことは無難かもしれないが、新鮮味はない。実際は平均値から外れたところに明日の宝がある。

現在の円安を切っ掛けに、日本の経済成長、年収がこの一〇年ほど殆ど伸びてないことが話題になっている。これは横並びでいることに安心感を持つ雰囲気があるような状況をもたらしている。最近の例では携帯電話のショートメッセージ通信はNTTが世界初に開発したが、スマホに発展させる知恵が出せなかった。決してネタがないわけではないが、こじんまり纏まり過ぎているのか。